

+ 輸血情報

【赤十字血液センターに報告された非溶血性輸血副作用—1997年—】

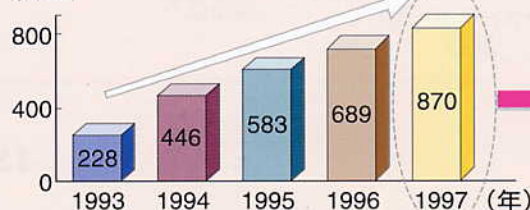
1997年の1年間に赤十字血液センター（以下、血液センター）に報告された輸血副作用の中で最も多い非溶血性輸血副作用について示します。

●輸血副作用報告件数

（輸血との因果関係が低いものも含む）

輸血副作用、合併症報告件数の推移

（件数）



1997年



非溶血性副作用が最も多く、全体の76%を占めています。

●非溶血性輸血副作用（1997年）

■副作用の種類

副作用の種類別内訳は前年（1996年）とほぼ同様の比率で、『アナフィラキシー（様）反応』、『アナフィラキシー（様）ショック』、『血圧低下』及び『呼吸困難』の重症例が全体の約3分の1を占めています。

*血圧低下：皮膚症状、喘鳴等のアナフィラキシー（様）症状を伴わない症例。その一部では、陰性荷電の白血球除去フィルター使用によるブラジキニンの産生¹⁾や、ACE（アンギオテンシン転換酵素）阻害剤の併用によるブラジキニン分解抑制²⁾との関連が指摘されています。

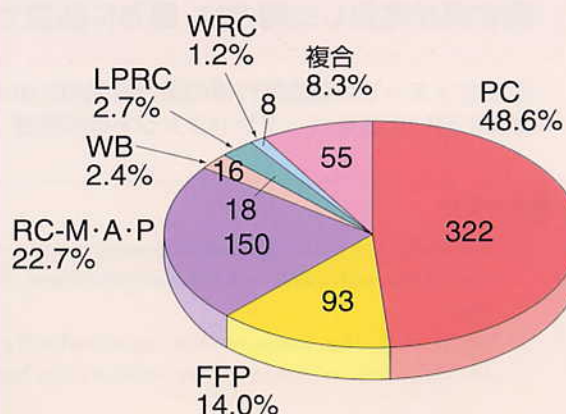
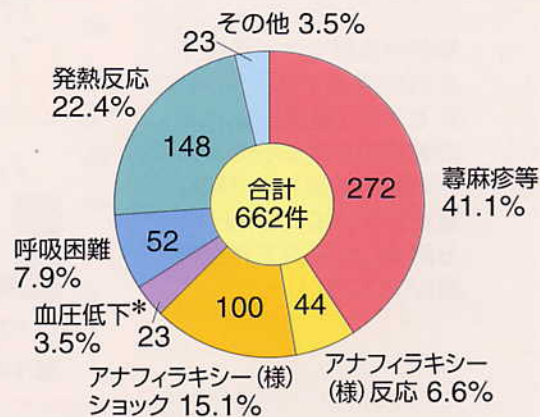
■使用製剤

PCの輸血による副作用が多く報告されています。

【参考】供給数に対する報告数の割合

PC：約1件/2千バッグ
FFP：約1件/3万バッグ
赤血球製剤^{*}：約1件/2万バッグ
WB：約1件/1万バッグ
※赤血球製剤：RC-M・A・P+LPRC+WRC

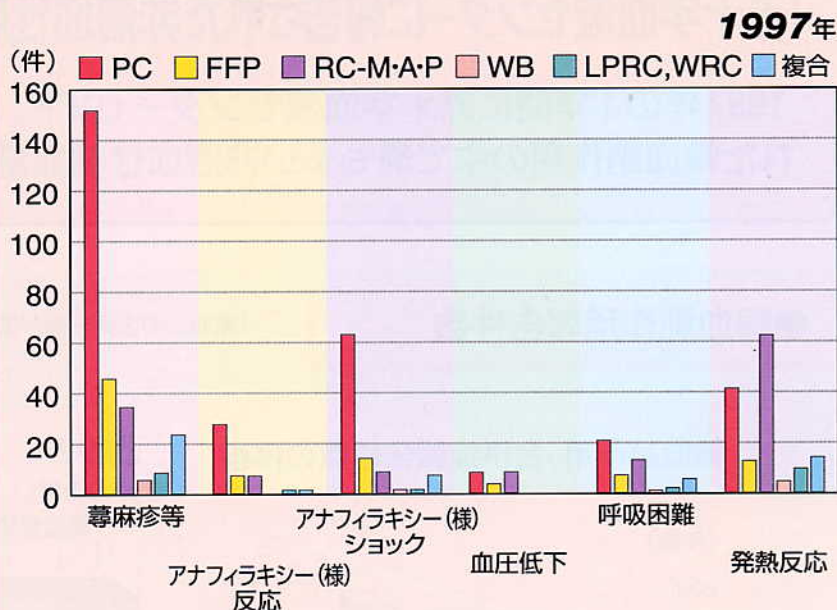
PC：濃厚血小板「日赤」
FFP：新鮮凍結血漿「日赤」
RC-M・A・P：赤血球M・A・P「日赤」
WB：人全血液CPD「日赤」
LPRC：白血球除去赤血球「日赤」
WRC：洗浄赤血球「日赤」
複合：輸血血液の種類が複数の症例



●非溶血性輸血副作用 (1997年)

■症状別使用製剤

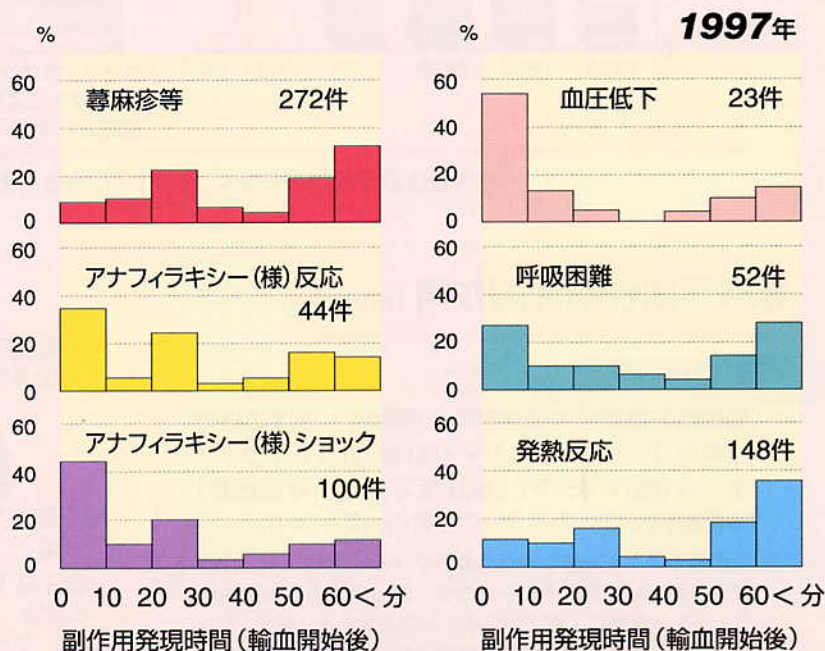
「蕁麻疹等」、「アナフィラキシー(様)反応」及び「アナフィラキシー(様)ショック」においてはPCが、「発熱反応」においてはRC-M・A・Pがそれぞれ最も多く使用されています。



■副作用発現時間

「アナフィラキシー(様)反応」の33%、「アナフィラキシー(様)ショック」の44%、「血圧低下」の52%及び「呼吸困難」の27%が、輸血開始後10分以内に発現しています。

輸血中は患者さんの様子を適宜観察することが必要ですが、重篤な副作用の発見のために少なくとも輸血開始後約5分間は観察を十分に行い、約15分経過した時点で再度観察してください。



副作用が発生した場合は、直ちに血液センター医薬情報担当者(MR)までご連絡ください。

血液センターでは輸血副作用の原因究明のための検査を行っています。

輸血に用いた血液バッグやセグメント等の保管、患者血液(輸血前・後)の提供等のご協力をお願いします。

■参考文献

- 1) Takahashi, T. A., et al. : Bradykinin generation during filtration of platelet concentrates with a white cell-reduction filter(letter). Transfusion, **35**, 967, 1995.
- 2) Mair, B., et al. : Hypotensive reactions associated with platelet transfusions and angiotensin-converting enzyme inhibitors. Vox Sang, **74**, 27-30, 1998.

日本赤十字社中央血液センター 医薬情報部

〒105-0011 東京都港区芝公園2-4-1

秀和芝パークビルB館14階

TEL 03-5733-8226 FAX 03-5733-8235

■ご注文・お問い合わせ